



Title	<書評>「サル学の現在」（立花隆著，1991. 8, 平凡社）
Author(s)	立花， 隆
Citation	大阪公衆衛生. 1995, 68, p. 18-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83774
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『サル学の現在』

立花 隆著 1991. 8 平凡社

著者 立花 隆の仕事量は素晴らしく大きい。「徹底した取材と、卓抜した分析力により幅広いニュージャーナリズムを確立した」として、菊地 寛賞他を受賞している。

20年ほど以前、社会人になって間もない私は仕事の関係で、とある講演を聴く機会があった。その詳細はもうすっかり忘れてしまったが子供の精神発達について、特に人が人として育っていく時の親子（母子）関係が語られ、その中で「サル学」からの引用があったのである。

「グルーミング」（毛づくろい）のことや、群れの構造の有様などが語られたようにおぼえている。たぶん、有名な「高崎山のサル」（伊谷純一郎：京大名誉教授）や「ニホンザルの生態」（河合雅雄：京大名誉教授）からの引用であったかと思われる。

当時、「サル学」はマスコミでも盛んに取り上げられ、サル社会（群れ）はボスザルを中心にした秩序ある二重同心円構造があるとか、辛島のサルがイモ洗い行動を始め、それを群れの他の仲間に伝えたことから、サルの間にも文化があり、文化は社会的に伝承されていく事がこれからわかる、などと話題になっていた。

さて、本著『サル学の現在』は当時の「サル学」から得られた知見の何十倍にも達するであろう新しい事実を読者に紹介してくれる。

研究のフィールドは、今や世界にまたがり、対象の霊長類もアフリカのチンパンジー、ゴリラ、ヒヒ、東南アジアのテナガザル、オランウータン、インドのハヌマンラングール、南米の新世界ザル等あらゆる種を研究するようになっている。また、サルの行動をフィール

ドで観察研究するだけでなく、サルの血液検査やDNAの分析、サルの脳研究など、生理学、脳神経生理学、生化学、遺伝学、心理学、社会学などあらゆる角度からの研究が試みられている。

その中で興味深い新事実を紹介してみると、ニホンザルでは群れを支配するボスザルの存在が否定され、群れの行動はメスが中心で、オスはそれについて歩いてるということがわかったり、ニホンザルのオスは、一時期群れを離れて独り修行に出るような「群れ落ち」という現象があるとか、ゴリラはゴリラ語を話し歌をハミングし、同性愛もあるとか、子殺しをする幾つかのサルの種があるとか、サルの脳を研究したことで、つい最近までおよそ10万人以上の精神病の人々が受けたロボトミー手術がとんでもなく非人間的なものであったということが、明らかにされた、などである。

著者はその前書きで、この本が自分が書いた本の中でも最も知的にチャレンジな本の一冊であると述べているが、まさにその通りで、今日の人間社会に起こる問題や歪みを理解する大きなヒントや鍵になる沢山の研究が紹介されている。

読後私は、人も含めた動物たちが、生きとしして群れられるにはどんなことが必要なのか、ある時の群れが次の群れに発展、あるいは分解、消滅するということはどういうことなのか、そして人類は、これからどこに向かおうとしているのか、など考えさせられている。

霊長類研究『サル学』は、つまり『ヒト学』ということなのであろう。

広辞苑の7割ほどのボリュームであるが、刺激的（時にはエッチ？）で苦もなく読める。

（東大阪市西保健所 長沼 均）